



## 日本初の女性化学者 黒田チカ



(講演会で1966年)

お茶の水女子大学名誉教授

### 前田 侯子

黒田チカは1884年九州佐賀で生まれ、明治初年にすでに“これからは女子にも学問が必要”と考える父の下で育てられた。幼時から勉強が好きであったチカは、佐賀女子師範を卒業後、1902年に女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）理科に進学。“理科の実験は学校でなければできないから”というのが理科を選んだ理由。卒業の頃には化学が最も好きになった。同校から勧められ、1907年に2年の課程の研究科に入学。卒業後は直ちに女高師の助教授に就任。1913年には、中等教

員の免許証を有する者という資格で初めて女子にも門戸を開いた東北帝国大学理科大学に入学出来た。日本最初の帝国大学女子学生3人の中の1人となった。東北帝大での眞島利行教授との出会いは、その後の黒田の化学者としての生涯に決定的な影響を与えた。教授の専門分野であった有機化学に興味を持った黒田は、3年生での卒業研究を同教授の指導で、天然色素の構造について行うことを希望した。眞島教授は「紫根に含まれる色素」が結晶として取り出せることを自ら確かめて、黒田の研究テーマとした。黒田自身による紫根の色素を結晶として得ることは困難の連続であったが、その中から多くの化学研究の方法を学んだという。1916年9月に東北帝大を卒業し、日本最初の女性理学士となった。その後も黒田の研究への努力と情熱により、さまざまな反応の結果を総合的に考え、2年後には世界に先駆けて紫根の色素（シコニンと命名）の構造を明らかにし論文に発表した。東京に戻ると東京女高師の教授に就任。1921年から2年間は、文部省外国留学生として、英国オックスフォード大学のパーキン教授の下に留学。その目的に理科研究に併せて家事研究とあった時代。帰国後は東京女高師の授業の時を除いては、新設の理化学研究所の眞島研究室で、紅花の色素の構造研究を行った。1929年に紅花の色素カーサミンの構造を明らかにし、論文に発表。この論文により1929年に東北帝大から理学博士の学位を受けた。東京女高師の先輩、保井コノに続く日本で二人目の女性理学博士、化学の分野では最初である。その後も、青花、黒豆、茄子等の色素や、ウニの棘の色素（ナフトキノン系）の研究を続けた。

1949年に新学制により生まれたお茶の水女子大学の教授に就任。定年退官後の1955年には、保井・黒田両名誉教授からの寄付金により「保井・黒田奨学基金」が理学部に創設された。これは現在に引き継がれている。

1959年には紫綬褒章を、1965年には勲三等宝冠賞を授与され、従三位に叙せられた。